

# バーナード・マラマッドの短編小説

住本 哲子

## Bernard Malamud's Short Stories

Akiko SUMIMOTO

### I

The weight of this sad time we must obey,

Speak what we feel, not what we ought to say: (V. iii, 324-325)<sup>1)</sup>

これは『リア王』(*King Lear*)の最後の一節である。リア王(Lear)の遺骸を前にして、エドガー(Edgar)は唯、深い哀悼の言葉を述べるだけである。悪人も善人も滅びた壮絶な悲劇の幕切れに対して何を語ることができようか。リア王の悲劇の発端は二人の姉妹、ゴネリル(Goneril)とリーガン(Regan)の巧言令色に惑わされた結果、王国の領土をすべて二人に譲ってしまい、末娘コーディリア(Cordelia)を疎んじたことにある。実の娘から非情な仕打ちを受けたリア王は怒り狂い、暴風雨の中をさまよう。何もかも失って始めてリア王は仮象ではなく真実を見ることができる。悲嘆と苦悩の旅路の果てにリア王を待ち受けていたのは、余りに苛酷な運命であったといえよう。われわれは運命に翻弄され、運命と闘う人間像に心を動かされる。シェイクスピア(William Shakespeare)は悲劇を書くことにより、人間の本質を顕示しようとした。マラマッド(Bernard Malamud)が“One learns from Shakespeare as well.”<sup>2)</sup>と語っているのは、シェイクスピアの影響を認めたものと考えることができる。マラマッドは現代の悲劇を書こうとした。勿論マラマッドの世界とシェイクスピアの世界は異なるが、根源的な人間の本質を追究しようとしている点ではマラマッドもシェイクスピアも同じであると思われる。

1959年、National Book Awardを受賞した時マラマッドは次のように語った。

It seems to me that the writer's most important task, no matter what the current theory of man, or his prevailing mood, is to recapture his image as human being as each of us in his secret heart knows it to be, and as history and literature have from the beginning revealed it.<sup>3)</sup>

人間存在の神秘を把握することが作家としての重要な使命であると表明しているのは興味深い。この言葉は受賞の対象となった短編小説集『魔法の樽』(*The Magic Barrel*, 1958)の創作態度を示すものであると同時に、終始一貫して変わらぬ理念であることは注目すべきことである。多くの批評家が指摘する通り、マラマッドは“moralist”なのである。マラマッドによれば、“morality”は「生」の尊厳を認識することを前提とし、宇宙における人間存在の謎を追求す

ると共に「生」の讃歌を謳うことを意味する。彼にとって“Art, in essence, celebrates life”なのであった。それではマラマッドの虚構の世界を明らかにするために、『魔法の樽』に収められた短編小説を取り上げ、考えてみたい。

『魔法の樽』に収められた13編の短編小説はいずれも1950年代に *Partisan Review* や *Commentary* に発表されたもので、“the complexity of life”を見事に写し出している。そのほとんどがユダヤ人を主人公とするものである。ユダヤ人といえば「金貸し」のシャイロック (Shylock) を思い浮べるであろうが、この短編に登場するユダヤ人は、靴屋の職人、パン屋、食料品店主、仕立屋、結婚仲介人等を職業とするもので、貧しい生活の人や暗い過去を持つ人が多い。貧しい生活に耐え、悲惨な境遇に耐えて「よりよい生き方」を求めて、精一杯生きようとする人々を描くマラマッドの筆致にはユーモアとペーソスが強く感じられ、われわれの共感をよぶのである。

マラマッドが多くの作品でユダヤ人を主人公として登場させているのは何故であろうか。しかも主人公は最初から悲しみを背負って生きているという印象を与える場合が多いのは何故であろうか。それは「ホロコースト」即ち、ナチスによるユダヤ人大虐殺がマラマッドの作品に葬送曲として悲しい雰囲気をかもし出しているのかもしれない。作者の意図はユダヤ人を特殊な民族として扱うのではなく、人間の悲劇的経験の象徴として描くことにあった。マラマッドはあくまでもユダヤ人を普遍的人間とみているわけである。

When asked about his role as a Jewish-American writer, he said: “What has made the Jewish writers conspicuous in American literature is their sensitivity to the value of man.” “Personally,” he concluded, “I handle the Jew as a symbol of the tragic experience of man existentially. I try to see the Jew as universal man.”<sup>4)</sup>

“Suffering mankind”の象徴がユダヤ人であるとすれば、「すべての人はユダヤ人」であるといえよう。マラマッドは極限状況に立たされた人間がどのように生きるかをいつも問題にしている。瀬戸際に立たされた時、自己の生き方の選択をいつも迫られる。魂の遍歴の後で真の自己を発見したり、真実を認識する過程を「寓話」として書いた作品が短篇には多い。

## II

ロス (Philip Roth) はマラマッドの追悼文の中で、マラマッドを評して“The sorrowing chronicler of human need clashing with human need, of need mercilessly resisted—and abated glancingly if at all—of blockaded lives racked with need for the light, the lift, of a little hope”<sup>5)</sup>と述べているが、これはマラマッドの作家としての功績に対する最高の讃辞であろう。

1950年代初期の短編にはユダヤ人居住地区を舞台とし、そこに繰り広げられるユダヤ人の人々の生活を写實的に描き出したものが多い。

「掛け売り」(“The Bill,” 1951)の主人公ウィリー (Willy) は狭い裏通りにある古ぼけたアパートの管理人をしている。そのアパートの向い側にあるパネッサ (Panessa) 夫妻の経営する食料品店でウィリーは時折50セント程度の買物をしていた。ところがある日、つけで買い物することを覚え83ドルもの借金を作ってしまう。つけの支払いを求められたウィリーはその店から遠ざかり、パネッサ夫妻をも避けるようになる。そんなある日ウィリー宛にパネッサ夫人から、10ドルだけ借金を返して欲しいという手紙が届く。パネッサが病気ということであっ

た。「貧しい生活」のウィリーには10ドルものお金はない。いたたまれない気持ちにおそわれ一日中地下室に隠れている。しかしウィリーも根っからの悪人ではない。翌日コートを質屋に入れて10ドルを握ってパネッサの店へと駆けつける。ところが皮肉なことにパネッサの棺おけが運ばれるのを見る。“if you were really a human being you gave credit to somebody else and he gave credit to you.” (MB, p. 130)<sup>6)</sup>といったパネッサの善意を踏みにじり、心ならずも背信行為をしてしまったウィリーの心中はいかばかりであろうか。

He tried to say some sweet thing but his tongue hung in his mouth like dead fruit on a tree, and his heart was a black-painted window.

Mrs. Panessa moved away to live first with one stone-faced daughter, then with the other. And the bill was never paid. (MB, p. 136)

何とも寒々とした気持ちにさせる物語である。ウィリーにとって生涯忘れることのできない、ぬぐい去ることのできない罪の意識が象徴的に表現されている。

「借金」(“The Loan,” 1952) も悲しい物語である。主人公リーブ (Lieb) は名前からユダヤ人であることがわかる。Lieb はGottlieb の縮約形で “beloved of God” の意味がある。リーブはパン屋だがやはり「貧しい人」である。生活の苦しさに耐えきれず、思わず涙を流しながらパンをこねたところ、涙の塩味のきいたパンが有名になりお店が繁盛するようになった。そんなある日、昔の移民仲間のコボツキー (Kobotsky) が借金を頼みに訪れる。コボツキーの不幸な身の上話に同情したパン屋はお金を200ドル貸してやる気になる。困った時に助け合うのが友人ではないかと思う。“And now that he had a cent to his name, what was there to live for if he could not share it with a dear friend?” (MB, p. 167) リーブは人間らしい生き方をしようと思う。ところが妻のベッシー (Bessie) は反対する。そして自分の不幸な過去を涙ながらに語る。ベッシーの父はボルシェビキの犠牲者となり、兄の家族は収容所で殺戮されたことを話す。「借金」の結末の一節である。

Screeching suddenly, she ran into the rear and with a cry wrenched open the oven door. A cloud of smoke billowed out at her. The loaves in the trays were blackened bricks—charred corpses.

Kobotsky and the baker embraced and sighed over their lost youth. They pressed mouths together and parted forever. (MB, p. 169)

「黒焦げのパン」はナチの収容所で虐殺された死体を連想させると共に、ベッシーの冷たい心をも象徴するものと思われる。リーブとコボツキーは失われた青春時代を思い出し、涙の別れを告げる。この短編には “Hitler’s incinerators” という語が一度だけ使われており、悲惨な過去が作品に暗い影を投じている。また涙を流す場面が多い。ユダヤ人の格言に「石鹼は体のため、涙は心のため」という諺がある。「人は石鹼で体を洗い、涙で心を洗う」という意味であろう。

「最初の七年」(“The First Seven Years,” 1950) の主人公フェルド (Feld) はポーランドからの移住者であり、名前からユダヤ人であることがわかる。フェルドという名前の由来は

ペレテ (Pelet) で, “one who escapes” の意味がある. 迫害を逃れて生きのびたユダヤ人に対して象徴的に使われる名前であるといわれる. 「最初の七年」はフェルドが娘の結婚相手を選ぶ物語である. フェルドはひそかに娘の結婚相手として公認会計士を志望しているマックス (Max) がふさわしいと考えていた. ところが徒弟のソウベル (Sobel) は5年前からずっとミリアム (Miriam) に思いをよせていたことがわかる. ソウベルの心情と娘の幸福を願うフェルドの気持が哀感をこめて描き出される.

Watching him, the shoemaker's anger diminished. His teeth were on edge with pity for the man, and his eyes grew moist. How strange and sad that a refugee, a grown man, bald and old with his miseries, who had by the skin of his teeth escaped Hitler's incinerators, should fall in love, when he had got to America, with a girl less than half his age. Day after day, for five years he had sat at his bench, cutting and hammering away, waiting for the girl to become a woman, unable to ease his heart with speech, knowing no protest but desperation. (MB, p. 19)

フェルドは物質的豊かさを娘の将来のために願う気持をおさえ, もう2年待つようにという条件をソウベルに告げる. この作品でわれわれはソウベルの唯, 「待つ」という姿に感動する. この短編でも “Hitler's incinerators” という語が一度だけ使われている. ソウベルもフェルドと同様ポーランドからの移住者である. 悲惨な過去を背負って生きるソウベルとミリアムの結婚を予測させる結末は明るい.

1950年代中期及び後期の短編には初期の短編と異なり, 「ユダヤ人」であるかどうかということに言及した表現が多くみられる. また, ユダヤ教に関連した語である “synagogue” とか “Menorah” という語が「天使レヴィン」 (“Angel Levine,” 1955) や「湖の精」 (“The Lady of the Lake,” 1958) に使われているのは重要な意味を持つと思われる.

「弔う人々」 (“The Mourners,” 1955) の主人公ケスラー (Kessler) はもと鶏卵鑑別人であったが, 現在は老令年金で細々と生計を立てている. ある日, 彼は不当な理由でアパートの立ち退きを申し渡される. 年の瀬の12月の寒空に家財道具もろともアパートから放り出される. 雨から雪に変わった凍りつくような街路で, こわれた椅子に坐ったまま老人は苛酷な運命にひたすら耐える. 哀れを催す場面である.

He had thought through his miserable life, remembering how, as a young man, he had abandoned his family, walking out on his wife and three innocent children, without even in some way attempting to provide for them ; without, in all the intervening years — so God help him — once trying to discover if they were alive or dead. How, in so short a life, could a man do so much wrong? This thought smote him to the heart and he recalled the past without end and moaned and tore at his flesh with his fingernails. (MB, p. 28)

ケスラーは過去の自分をかえりみて良心の苛責にさいなまれる. ケスラーは何もかも剝奪されて始めて, 若い頃見捨てた家族のことを思い出す. 無情な雪の中でケスラーは, 自分が今迄してきた行為に対する自責の念にかられる. 彼の苦悶する姿は痛ましい. 人間は泣きながらこの世に生まれてくるのであり, 人生の辛酸をなめ悲運に耐えながら生きる. 不幸のどん底に突き

落とされたケスラーは唯、祈りをささげることにより、神のゆるしを乞うことにより救われる。今迄他人を愛することもせず、自から、他人から隔絶された状況にあったケスラーは雪の中で、魂の遍歴を経験する。ケスラーも家主も膝まずいて祈りをささげる。

When after a while, he gazed around the room, it was clean, drenched in daylight and fragrance. Gruber then suffered unbearable remorse for the way he had treated the old man.

At last he could stand it no longer. With a cry of shame he tore the sheet off Kessler's bed, and wrapping it around his bulk, sank heavily to the floor and became a mourner. (MB, pp. 28-29)

この結末は余りに唐突で理解できないと考える批評家も多い。少し不自然なところは確かにあるが、このケスラーの部屋はケスラーの部屋であって、実は違うと考えればどうであろうか。二人は今「ユダヤ教の礼拝堂」にいると解釈することはできないだろうか。あるいは、少なくとも管理人が不潔だといった部屋を教会堂にみたてて祈っているのである。

「天使レヴィン」と「湖の精」の二編は「魔法の樽」(“The Magic Barrel,” 1954)と並んで傑作であると思われる。「天使レヴィン」と「湖の精」は共に主人公のユダヤ人としてのアイデンティティを問う、「寓話的物語」とみることができる。

「天使レヴィン」の主人公マニシェヴィツ (Manishevitz) は不幸のどん底にいる。彼がユダヤ人であることは名前からわかる。仕立屋は火事で店も焼失し、二人の子供も失い、その上妻も病気になり、自分自身も背中の激痛に仕事も思うようにできなくなる。仕立屋は神の助けを祈る。ある日のこと、ユダヤ系黒人のレヴィン (Levine) が仕立屋のもとを訪れ、救済の手を差しのべようとする。しかしマニシェヴィツは天使と自称するレヴィンに対して、“You are maybe jewish?”とか“If you are a Jew, say the blessing for bread.”等ときいて本当に天使であるかどうかを試す。「天使なら翼があるはずなのに翼もない」し、「どうして神様は黒人の天使を私のもとに遣わされたのか」と考えてレヴィンを「にせ物」と断定する。一時少し軽くなっていた痛みの再発に仕立屋は苦しみ、神を責める。

Who, after all, was Manishevitz that he had been given so much to suffer? A tailor.

Certainly not a man of talent. Upon him suffering was largely wasted. It went nowhere, into nothing: into more suffering. (MB, p. 48)

マニシェヴィツは肉体的苦痛の極みまで経験する。その時「もしかして本物の天使だったら」と考えて思い悩む。なおも自問自答を重ねた上で、レヴィンをさがしに行く。キャバレーにいるレヴィンを見つけるが声をかけないで帰る。妻のファニー (Fanny) は死の床にいた。レヴィンの夢をみた仕立屋はレヴィンを再度さがしに行く。

He knew this act was the last desperate one of his woe: to go without belief, seeking a black magician to restore his wife to invalidism. Yet if there was no choice, he did at least what was chosen. (MB, p. 50)

ハーレムのキャバレーで酔いつぶれているレヴィンをみつけた仕立屋はレヴィンに話しかける。しかし今度は仕立屋が試される。「レヴィンが天使であることを信じる」気持と、「疑う」気持との両極を振子のようにマニシェヴィツは行きつ戻りつする。二つの中のどちらか選択するしかない。迷いぬいた挙句、仕立屋は神の恩寵にすがる決意をする。次の一節は結末の一節である。仕立屋はレヴィンの昇天を見る。

Luckily he could see through a small broken window. He heard an odd noise, as though of a whirring of wings, and when he strained for a wider view, could have sworn he saw a dark figure borne aloft on a pair of magnificent black wings.

A feather drifted down. Manishevitz gasped as it turned white, but it was only snowing.

He rushed downstairs. In the flat Fanny wielded a dust mop under the bed and then upon the cobwebs on the wall.

'A wonderful thing, Fanny,' Manishevitz said. 'Believe me, there are Jews everywhere.'  
(MB, p. 54)

「ファニーの病気もなお、天使も昇天する」という結末は滑稽で奇妙だと酷評する批評家もいるが、特に最後の「ユダヤ人はどこにでもいるんだな」という言葉には思わず吹き出してしまう。この短編でも主人公の苦しみ、そして選択するまでの心の葛藤、選んだ結果の嘘のような大団円、全く見事に巧妙に仕組まれている。黒い魔術師を操るもう一人の魔術師が背後にひそんでいるのに違いない。

「湖の精」の主人公レヴィン (Levin) はロマンスを求めてヨーロッパへ出かける。彼は名前をフリーマン (Freeman) と変えるが、それは自由になりたいという彼の願望の表明と考えることができる。ある日、イソラ・デル・ドンゴ島で若い女性に出会い、彼女に夢中になる。イザベラ (Isabella) は “Are you perhaps Jewish?” とフリーマンにたずねる。彼は自分がユダヤ人であることを隠す。彼は嘘をいったことを悩む。何度も自分の素姓を打ち明けようと思うが、イザベラを失うことを恐れて、あくまでも真実を隠す。しかし再度 “Are you a Jew?” と聞かれるが嘘を通す。結局、皮肉なことに彼女がユダヤ人であったことを知らされる。宮殿の中に、ダンテの地獄編の情景を描いた壁掛けがあり、そこには嘘をついた為に永遠に地獄で苦しむ癩病患者の絵が描かれていた。その時には自分が同じ運命をたどるとは予想もしなかったが、自分の素姓を隠した為に愛する人を失ってしまう。イザベラはフリーマンに乳房をみせる。乳房にはブッヘンヴァルトの収容所の入墨の数字がつけられていた。イザベラはユダヤ人であることを打ち明け、 “I treasure what I suffered for.” (MB, p. 119) といってから、霧の中に姿を消す。フリーマンは呆然と立ちつくす。

He groped for her breasts, to clutch, kiss or suckle them ; but she had stepped among the statues, and when he vainly sought her in the veiled mist that had risen from the lake, still calling her name, Freeman embraced only moonlit stone. (MB, p. 119)

レヴィンもイザベラも自分の素姓を偽ったという点で同罪といえるが、二人の嘘の目的が異なっている。イザベラはフリーマンが自分の結婚相手としてふさわしいかどうか判断するまでの

短期間の嘘であるのに対し、フリーマンは自分の過去は犠牲にしてもいいと考えている。イザベラにとって過去は“meaningful”なのに、フリーマンにとって過去は“expendable”なものである。フリーマンは過去を否定した為に恋を失い、未来をも失うという皮肉な結末である。過去を葬り去ろうとしたフリーマンは眼前に忘れることのできないものとして過去を突きつけられる。その上求めようとしたものも失ってしまうという苦い経験を通してレヴィンのアイデンティティを問おうとしていると思われる。「湖の精」は幻想的な美しい作品である。アウシユピッツ等の収容所での体験はもっとも忌むべき悪夢であろう。イザベラは最後までナチの収容所での虐待について語らない。フリーマンにとってイザベラは“elusive”ではかなく消え去る運命にあったのだ。

### Ⅲ

マラマッドの『魔法の樽』に収められた短編小説の中から、6編を取り上げ主として、「結末」の解釈をめぐって考察した。マラマッドの場合作品を書き始める際に、最初に「結末」について考えてから「冒頭」を書き始めるようである。「結末」の最後のパラグラフはほぼ完全な文章が出来上っており、もとの構想にそって作品を書き上げるのだとマラマッド自身語っているのは興味深い<sup>7)</sup>。とすれば「結末」の一節は重要な意味を持っていると考えてよいであろう。

ナボコフ (Vladimir Nabokov) は「作品は新しい世界の創造である」と述べ、偉大な作家としての条件は“storyteller”と“teacher”と“enchanter”の三つの要素をかねそなえていることであると断言している。いいかえると、“story”と“lesson”と“magic”が必要なのだ。殊に“the magic of art”が重要な位置を占める。創作された作品が“invention”であるとすれば“fiction”は“fiction”である。作品が「虚構の世界」ならば「虚構」を真実らしくみせるための巧妙な仕掛けが必要となってくる。この仕掛けこそナボコフのいう「魔術」である。マラマッドはこの「魔術」に強い興味を持っていた。短編集の表題が『魔法の樽』であることや、「天使レヴィン」では“a black magician”という語が使われており、また「湖の精」では“a real magician”という語がみられることから、マラマッドが意識的に「魔術」あるいは「魔術師」という語を使用したと考えてよい。「魔術師」マラマッドが『魔法の樽』において創造した世界は彼独自の世界であった。われわれはその不思議な魅力に永久に呪縛され続けるであろう。

### 注

- 1) *The Riverside Shakespeare* Vol. II, 1295, Houghton Mifflin Company (1974)
- 2) Leslie and Joyce Field: “An Interview with Bernard Malamud” in *Bernard Malamud: A Collection of Critical Essays*, 13, Prentice-Hall (1975)
- 3) Sheldon J. Hershinow: *Bernard Malamud*, 1, Frederick Ungar Publishing Co. (1980)
- 4) Leslie and Joyce Field: “Introduction—Malamud, Mercy, and *Menschlichkeit*” in *Bernard Malamud: A Collection of Critical Essays*, 7, Prentice-Hall (1975)
- 5) Philip Roth: “Pictures of Malamud,” *The New York Times Book Review*, 40, (April 20, 1986)
- 6) Bernard Malamud: *The Magic Barrel*, Penguin Books (1968) 以下の引用は MB と略す。
- 7) Daniel Stern: “The Art of Fiction: Bernard Malamud,” *Paris Review*, No. 61, 57 (Spring 1975)
- 8) Fredson Bowers ed.: *Vladimir Nabokov: Lectures on Literature*, 5 ~ 6 Harcourt Brace Jovanovich (1980)

## 文 献

- 1) Alter, Robert : *Defenses of the Imagination : Jewish Writers and Modern Historical Crisis*, The Jewish Publication Society of America (1977)
- 2) Astro, Richard and Benson, Jackson J. eds. : *The Fiction of Bernard Malamud*, Oregon State University Press (1977)
- 3) Avery, Evelyn Gross : *Rebels and Victims : The Fiction of Richard Wright and Bernard Malamud*, Kenikat Press (1979)
- 4) Bowers, Fredson ed. : *Vladimir Nabokov : Lectures on Literature*, Harcourt Brace Jovanovich (1980)
- 5) Bryant, Jerry H. : *The Open Decision : The Contemporary American Novel and Its Intellectual Background*, Free Press (1970)
- 6) Frankel, Haskel : "Interview with Bernard Malamud," *Saturday Review*, 39 ~ 40 (September 10, 1966)
- 7) アレン・グッドマン著, 佐々木肇訳 : アメリカのユダヤ系作家たち, 研究社 (1979)
- 8) Hassan, Ihab : *Contemporary American Literature 1945-1972*, Ungar (1976)
- 9) Hershinow, Sheldon J. : *Bernard Malamud*, Frederick Ungar Publishing Co. (1980)
- 10) Hoffman, Daniel ed. : *Harvard Guide to Contemporary American Writing*, Belknap Harvard (1979)
- 11) 岩元 巖 : 「幻影と現実——マラマッドの主人公たち」英語青年 9月号, 11~13 (1986)
- 12) 岩元 巖 : マラマッド, 冬樹社 (1979)
- 13) Karl, Frederick R. : *American Fictions 1940-1980 : A Comprehensive History and Critical Evaluation*, Harper & Row (1983)
- 14) Kaganoff, Benzion C. : *A Dictionary of Jewish Names and their History*, Routledge & Kegan Paul (1978)
- 15) Kazin, Alfred : "Fantasist of the Ordinary," *Commentary*, Vol. 24, 89~92 (July 1957)
- 16) Klein, Marcus : *After Alienation : American Novels in Mid-Century*, Midway Reprint (1978)
- 17) Field, Leslie A. and Field, Joyce W. eds. : *Bernard Malamud : A Collection of Critical Essays*, Prentice-Hall (1975)
- 18) Field, Leslie A. and Field, Joyce W. eds. : *Bernard Malamud and the Critics*, New York University Press (1970)
- 19) Moore, Harry T. ed. : *Contemporary American Novelists*, Southern Illinois University Press (1964)
- 20) Roth, Philip : "Pictures of Malamud," *The New York Times Book Review*, 1, 40 ~ 41 (April 20, 1986)
- 21) Shenker, Israel : "Bernard Malamud on Writing Fiction," *Writer's Digest*, 22~23 (July 1972)
- 22) Sheppard, Ronald Z. : "About Bernard Malamud," *Book Week*, 5 (October 13, 1963)
- 23) Stern, Daniel : "The Art of Fiction : Bernard Malamud," *Paris Review*, No. 61, 40 ~ 64 (Spring 1975)